

Title	Bio-demographic Approaches to Economics
Author(s)	影山, 純二
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61459
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (影山 純二)

論文題名

Bio-demographic Approaches to Economics
(経済学への生物人口学的接近)

論文内容の要旨

本稿は、人口学や生物学の知見を経済学に導入した成果を集めたものである。第1章にて本稿の背景に触れ、続く各章では具体的成果を提示した。

まず第2章で提示したのは、余命伸長の貯蓄率に対する影響についてである。とくに余命が伸長する際の生存曲線の形状変化を人口学的知見を用いて精査し、余命伸長が貯蓄率に正の効果を与えることを理論的に示した。余命が伸長する下では不確実性が増し、加えて勤労世代の貯蓄が退職世代の貯蓄取崩しを上回るためである。この理論的仮説は世界各国のデータを用いて実証的に検証され、余命伸長が大きいほど貯蓄率が高くなることを明らかにした。

第3章と第4章では、生活史理論を用いて時間割引率を生物学的に基礎付けた。生活史理論とは、生殖や生存に対する最適資源配分を分析する進化生物学の理論モデルである。とくに第3章では時間割引率を死亡率と結ぶ基本モデルを提示し、両者が生殖（現在）と生存（将来）のトレードオフの帰結として決定されることを示した。その上で第4章では子ども期をモデルに導入し、時間割引率が年齢に対してU字型になることを示した。加えて、その過程で導出される生物学の生存価値について触れ、そこから得られる行動学上の含意や経済学の生存価値との関係について考察した。

第5章と第6章は、経済学の根源的テーマである幸福度についてである。第5章では、男性の方が生物として「壊れやすい」という生物学的知見を幸福度研究に導入して、幸福度が下がるほど男性が早死する傾向が強まり、生存における女性のアドバンテージが大きくなるという仮説を導出した。その上で、逆因果を整理し、この仮説が実証的に成立することを世界価値観調査のデータを用いて示した。また第6章では、第5章の結果を受け、旧共産圏といった社会全体の幸福度が低い地域において女性の平均的な幸福度が低くなることを人口学的に説明し、世界価値観調査のデータを用いて実証した。すなわち、社会全体の幸福度が低い地域では男性が早死する傾向が高まり、女性の未亡人比率が上昇し、平均値としての女性の幸福度が下がるためである。

最後に第7章では、生物人口学的に提示される生身に近い人間像を考察対象とすることは、経済学の出発点にもあった方法論であることを議論した。本稿は、その自然史的視点を再導入することにより経済学を緻密化できるという点で、新領域の開拓に貢献したものと言える。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (影山純二)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教授 池田新介
	副 査	教授 大竹文雄
	副 査	教授 (京都女子大学) 橋木俊詔
	副 査	教授 (立正大学) 吉川 洋
	副 査	講師 犬飼佳吾

論文審査の結果の要旨

[論文内容の要旨]

本論文は、人口学や生物学の知見を経済学に導入した成果を集めたものである。第1章にて本論文の背景に触れ、続く各章では具体的成果を提示した。

まず第2章で提示したのは、余命伸長の貯蓄率に対する影響についてである。とくに余命が伸長する際の生存曲線の形状変化を人口学的知見を用いて精査し、余命伸長が貯蓄率に正の効果を与えることを理論的に示した。余命が伸長する下では不確実性が増し、加えて勤労世代の貯蓄が退職世代の貯蓄取崩しを上回るためである。この理論的仮説は世界各国のデータを用いて実証的に検証され、余命伸長が大きいほど貯蓄率が高くなることを明らかにした。

第3章と第4章では、生活史理論を用いて時間割引率を生物学的に基礎付けた。生活史理論とは、生殖や生存に対する最適資源配分を分析する進化生物学の理論モデルである。とくに第3章では時間割引率を死亡率と結ぶ基本モデルを提示し、両者が生殖（現在）と生存（将来）のトレードオフの帰結として決定されることを示した。その上で第4章では子ども期をモデルに導入し、時間割引率が年齢に対してU字型になることを示した。加えて、その過程で導出される生物学の生存価値について触れ、そこから得られる行動学上の含意や経済学の生存価値との関係について考察した。

第5章と第6章は、経済学の根源的テーマである幸福度についてである。第5章では、男性の方が生物として「壊れやすい」という生物学的知見を幸福度研究に導入して、幸福度が下がるほど男性が早死する傾向が強まり、生存における女性のアドバンテージが大きくなるという仮説を導出した。その上で、逆因果を整理し、この仮説が実証的に成立することを世界価値観調査のデータを用いて示した。また第6章では、第5章の結果を受け、旧共産圏といった社会全体の幸福度が低い地域において女性の平均的な幸福度が低くなることを人口学的に説明し、世界価値観調査のデータを用いて実証した。すなわち、社会全体の幸福度が低い地域では男性が早死する傾向が強まり、女性の未亡人比率が上昇し、平均値としての女性の幸福度が下がるためである。

最後に第7章では、生物人口学的に提示される生身に近い人間像を考察対象とすることは、経済学の出発点にもあった方法論であることを議論した。本論文は、その自然史的視点を再導入することにより経済学を緻密化できるという点で、新領域の開拓に貢献したものと言える。

[審査結果の要旨]

本論文は、加齢や性差といった生物人口学的な要因が、経済主体の行動や幸福度にどのような影響を与えるかを理論と実証の両面から明らかにした独創性の高い研究である。以上から、博士（経済学）に値すると判断する。